



ピアニストと調律師は対等。
一緒に素晴らしい音楽をつくり上げたい。



特別賞／ピアノ・レコーディング／ピアニスト
高木 裕氏

(プロフィール) **高木 裕** (たかぎ・ゆう) 1952年三重県生まれ、東京育ち。ニューヨークにてスタインウェイ&サンズ本社の研究開発コンサルタント兼調律技術統括マネージャーであったウィリアム・ガーリック氏とフランス・モア氏(ホロヴィッツ、ルービンシュタイン等の調律担当)に師事。コンサート・チューナーとして、著名アーティストのコンサートやレコーディングを数多く手がけている。92年にニューヨークのスタインウェイ本社コンサート部の形態を日本に導入。自社(タカギクラヴィア社)所有コンサートグランドピアノの中からアーティストが希望するピアノを選び、好みの調整を施してステージに持ち込むアーティスト・サービスを開始。これにより、現場にあるピアノで最大限の努力をしようとするそれまでの形式から、技術者とピアニストが理想とするコンサートやレコーディングが可能となり、これまで全国で8,000回を越えるステージを展開。日本唯一かつ最大のコンサート&アーティストのサポート役となっている。著書に「スタインウェイ戦争」「調律師、至高の音をつくる」「今のピアノでショパンは弾けない」「ホロヴィッツ・ピアノの秘密」。



フレッシュアーティスト賞／ピアニスト
務川 慧悟氏

激しい情熱を内に秘めたラヴェル。
自分もそんなアーティストに。



6歳の頃



ホストファミリーと



古楽器の演奏



エリザベートコンクール
ファイナル演奏時



ラヴェルレコーディング時

(プロフィール) **務川 慧悟** (むかわ・けいご) 1993年愛知県生まれ。東京藝術大学を経て、2014年パリ国立高等音楽院に首席合格し渡仏。パリ国立高等音楽院、第3課程ピアノ科、室内楽科を修了し、現在第2課程フォルテピアノ科に在籍。21年、世界三大コンクールの1つである、ベルギーのエリザベート王妃国際音楽コンクールにて第3位受賞。19年にはフランスで最も権威のあるロン＝ティボー＝クレスパン国際コンクールにて第2位受賞。長い歴史と伝統のある2つの国際コンクールの上位入賞で大きな注目を集め、現在、日本とヨーロッパを拠点にソロ、室内楽と幅広く演奏活動を行っている。バロックから現代曲までレパートリーは幅広く、各時代、作曲家それぞれの様式美が追究された演奏、多彩な音色には定評がある。また現代ピアノのみならず、古楽器であるフォルテピアノでの奏法の研究にも取り組んでいる。フランス留学後、研究を深めている作曲家の1人であるモーリス・ラヴェルの作品を取り上げた「ラヴェルのピアノ作品全曲演奏」をテーマにした全6回のリサイタルを17年チャンネル・ピグマリオン・デイズにおいて開催。

名古屋製鉄所の景色を見ながら育った少年時代

務川さんのお父様は旧新日本製鉄にお勤めだったと伺いました。

務川 そうなんです。僕も愛知県東海市にある新日鉄の社宅で生まれて、ずっとその近隣で育ったので、名古屋製鉄所が身近な存在でした。父は研究職だったのですが、いつも忙しそうにっていて、休日も自宅で論文を書いたりしていました。

務川さんがピアノを始めたきっかけは何ですか。

務川 母の影響です。母はピアノの先生で、自宅でピアノ教室を開いていたので、気がついたら自然にピアノに触れていました。最初は鍵盤を叩くと音が出るのが楽しくて、ゲーム感覚で遊んでいた記憶があります。

本格的に音楽の道に進もうと決めたのはいつ頃でしょうか。

務川 中学3年生のときです。この年の全日本学生音楽コンクールでピアノ部門1位となり、自分の実力が実感でき、将来演奏家としてやっていけるのかもしれないと思うようになりました。

東京藝術大学を経てパリの国立音楽院に留学されていますが、パリを選んだ理由を教えてください。

務川 これは直感なんです。もともとドイツ音楽が好きだったので留学するならドイツかなと思っていたのですが、大学1年生のとき、初めての海外旅行でパリを訪れ、街の魅力に衝撃を受けました。街並みの美しさだけでなく、もちろん治安の悪い部分もありますが、そうしたすべてが刺激的で、それで留学先もパリに決めた感じですね。

ケガでギタリストの夢をあきらめ調律師の道へ

高木さんが音楽と出会われたのはいつ頃でしょうか。

高木 僕は東京の自由が丘で育ち、高校時代はライブハウスでボサノバギターを弾くアルバイトをしていました。毎晩のように演奏があつて高校には寝に行くような状態で(笑)。高校はアルバイト禁止だったので

が、母子家庭だったので先生たちも大目に見てくれましたね。

将来はギターで食べていくつもりだったのですが、高校3年生のときに大ケガをして中指が動かなくなってしまったんです。すごくショックで、しばらく北海道を一人旅して、母親からは搜索願ひも出されしました(笑)。その後、いろいろ考えて調律師になることを決意しました。ボサノバって不協和音のかたまりで、調律がびったり合っていないと音が濁るんです。だからライブハウスにはしよっちゅうピアノの調律師が来ていました。その影響です。

そこから調律の勉強を始めたのですか。

高木 はい。ただ、その頃は、ピアノの本場はヨーロッパだと思って、渡欧して現地の楽器店を回って修行をさせてもらいました。お金がなくなると日本に帰ってきてタカシ運転手をして、また渡欧する。それを繰り返して、24歳のときにタカギクラヴィアという会社を立ち上げました。でもぜんぜんお客さんがいなくて開店休業状態でしたね。そのとき、たまたま大手楽器店の嘱託として調律の仕事をさせてもらう機会があり、だんだん仕事が軌道に乗るようになりました。

高木さんご自身のキャリアの転機となったのはいつ頃ですか。

高木 やはりニューヨークのスタインウェイを訪れたことですね。1987年に初めてマンハッタン57丁目にある本社を訪ね、地下に置かれたビンテージピアノを見せてもらいました。ホロヴィッツやルービンシュタインといった巨匠たちが弾いたピアノは、鍵盤を叩いたらすごく乾いた音がする。驚きました。今のピアノは皆、量産品で甘くまろやかな音ばかりですが、本来、甘い音だけで音楽は表現できない。これが本物のスタインウェイなのかと感動しました。

その後、スタインウェイ社コンサート部のチーフであるフランス・モアや研究開発の中心にいたウィリアム・ガーリックを紹介され、彼らから本当にたくさんのことを学ばせてもらいました。

奥深くに激しい情熱を宿しているラヴェル

務川さんはラヴェルをテーマにしたリサイタルを開くなど、ラヴェ



© ヨコオスタジオ / 日本製鉄

第33回 日本製鉄音楽賞 受賞記念コンサート 7月21日に紀尾井ホールにて開催

7月21日、紀尾井ホール(東京・千代田区)で第33回日本製鉄音楽賞の受賞記念コンサートが開催されました。

「日本製鉄音楽賞」は、日本の音楽文化の発展と、将来を期待される音楽家のさらなる活躍の支援を目的として創設したものであり、1990年の創設以降、毎年、受賞者への贈呈式と受賞記念コンサートを開催しています。本年は、将来を期待される優れた演奏家に贈られる「フレッシュアーティスト賞」は、ピアニストの務川慧悟氏、音楽文化の発展に大きな貢献を果たした個人に贈られる「特別賞」は、ピアノプロデューサー・ピアノ技術者である高木裕氏が受賞。贈呈式は2月22日に日本製鉄本社で行われ、橋本社長から記念の盾と賞金が贈られました。



© ヨコオスタジオ / 日本製鉄

第1部では、高木氏による受賞記念トークが行われた。「究極の裏方」である調律師に光を当ててくださったと感謝を述べられたのち、フランツ・モア氏から教わった「音楽よりピアノが目立っちゃダメだよ」の言葉を刻みながら従事してきたことを写真とともに語った。また、高木氏は「ホールも楽器で音色がある」と明かし、紀尾井ホールはピカイチだと絶賛された。



© ヨコオスタジオ / 日本製鉄

第2部では、務川氏による演奏が行われた。古楽器(フォルテピアノ)とモダンピアノを使用した弾き比べというサプライズ演出に観客がどよめく。「古楽器を弾けるのは幸運なこと。大好きなクラシックをこういう形で皆さんと共有できるのが嬉しい」。務川氏の手により3台のピアノそれぞれが違う音の表情をもって躍動しているのを体感した観客は、その感動を万雷の拍手で表現した。



© ヨコオスタジオ / 日本製鉄

フォルテピアノとホロヴィッツピアノは、タカギクラヴィア所有。

時代を越えた3台の名器が集う

今回の記念コンサートでは3台のピアノが登場。左から、ブレイエル(1843年製フォルテピアノ)、スタインウェイ(ニューヨーク 1887年製・通称ホロヴィッツピアノ)、スタインウェイ(ハンブルク 2018年製)と、名器が舞台に華を添えた。フォルテピアノとホロヴィッツピアノは高木氏が務川氏のために調律し、務川氏がピアノと曲のマリアージュを観客に届ける、2人の受賞者ならではの特別なコンサートとなった。

本演奏の様子は、日本製鉄ホームページでオンライン配信しています。 <https://www.nipponsteel.com/csr/social/music/prize.html>

ル作品にこだわって演奏活動をされています。

務川 フランスの作曲家なのでパリに留学してから本格的に弾くようになったのですが、直感的に自分に合っていると感じました。ラヴェル作品は最初は冷たい印象があるのですが、実は奥深くにもものすごく情熱的な部分がある。たくさん弾くうちにそのことに気がついたんです。そうした2面性に惹かれますし、自分自身もラヴェルのように情熱を秘めたアーティストでありたいと思います。

——アルバム『ラヴェル…ピアノ作品集』は、高木さんの会社が所有するスタインウェイのビンテージピアノで弾いているとお聞きました。

務川 はい。レコーディングで使わせてもらいました。手づくりの良さというか、ビンテージならではの個性的な音がにじみ出てくる、そんなピアノでした。

——現代ピアノ以外に、古楽器のフォルテピアノの奏法研究にも取り組まれているそうですが、きっかけは何でしょうか。

務川 僕はバリ音楽院でフォルテピアノを教えているパトリック・コーエン先生に師事しているのですが、彼はとにかく個性的で、電子機器を1つも持っていない。携帯電話はもちろん家に固定電話もない。だから連絡をとるときは手紙です(笑)。自分の芸術性の追求のためにそうしているのですが、人間的にも本当に素晴らしい方で、そのコーエン先生の影響でフォルテピアノに興味を持つようになりました。古楽器に挑戦することで自分自身の音楽性の幅も広がったと感じます。

——2021年のエリザベート王妃国際コンクールで3位とられました。コンクールでのエピソードをお聞かせください。

務川 エリザベート王妃国際コンクールの前に、19年のフランスのロン・ティボー・クレスパン国際コンクールで2位になり、もうコンクールは卒業してもいいかなという気持ちもありました。ただ、やっぱりエリザベート王妃国際コンクールは世界三大コンクールの1つだし、その大舞台に挑戦しないと一生後悔するかもしれないと思って出場を決めました。

エリザベート王妃国際コンクールはすごくユニークなコンクールで、ファイナリストは1週間、携帯電話を取り上げられて、全員でシャベルと呼ばれるお城のような施設で共同生活をします。いろんな国籍や個性を持つピアニストが集まって、一緒にごはんを食べて、自由時間も過ごして、もちろんピアノも弾いて交流を深める。とても刺激的な1週間でした。世界は広いし、才能のある人がたくさんいることを実感しました。

「昔は音を聴けば誰の演奏かがわかりました」

——高木さんはホールにピアノを持ち込んでコンサートを開催するスタイルを確立しました。

高木 ピアノコンサートはもともとがそういう形式だったんです。ニューヨークのスタインウェイ社の地下には、数十台のコンサートピアノがあり、巨匠たちは、好みのピアノを選び、調整して、ホールに持ちこんでいました。それが本来の形で、僕はそれをもとに戻したただなんです。

昔はそれぞれのピアニストに独特の音色があった、ちよつと聴けばこれはホロヴィッツだなとす

ぐにわかった。それは毎回、調律師がそのピアニストが選んだピアノを調整して持ち込んでいたからなんです。

——調律師とピアニストの関係は今より密接だったわけですね。

高木 そうです。そして、僕は調律師とピアニストの関係は対等ではなくてはならないとも思っています。もし調律師がピアニストよりピアノのことを知らなかったら調律師を辞めたほうがいい。そのくらい僕たちは技術を磨かないといけないし、だからこそ一緒に良い音楽がつくれるんです。

ホールに置かれたピアノでは、調律師ができることは限られてきます。でも、こちらから持ち込むのであれば、ピアニストにとって理想的な音を追求できる。そのためにピアノを持ち込むスタイルをつくり、これからもこだわっていきたいと思っています。

——務川さんは7月に紀尾井ホールで受賞記念コンサートを開かれます。最後に紀尾井ホールの印象についてお聞かせください。

務川 これまで何度かコンサートを開かせてもらっていますが、とにかく音の広がりや素晴らしいです。響きが良くて、1つの音を出したときに、それがホール全体に広がっていくのがすごくよくわかります。小さなコンサートでしか伝えるのが難しい繊細なメッセージも、紀尾井ホールなら伝えられる。受賞コンサートでまた弾かせてもらうのが楽しみです。

(このインタビューは、今年の春に行われました)